

YOKOKOKU KOKUKOKU

# 横国刻々



これからを、ここから。

横国の  
人材育成  
プログラムを  
特集

## CONTENTS

特集

02-13

### FROM NOW ON, FROM HERE

これからを、ここから。

04-05

### 教育学部

ICTの活用で、不登校支援はできるのか  
「GIGAスクール構想-メタ・バースの活用-」

06-07

### 経済学部

経済学×データ統計分析で即戦力を養う  
「経済学部データサイエンス教育プログラム」

08-09

### 経営学部

データサイエンス力で新たな価値の創造を  
「経営学部データサイエンス教育プログラム」

10-11

### 理工学部

最先端の研究に触れるチャンスを学部生に  
「ROUTE -Research Opportunities for Undergraduates」

12-13

### 都市科学部

複雑に交錯する都市の課題に向き合う力を  
「都市科学A・B・C・S」

14-19

### YNU PEOPLE

14 「美術家」と「教育者」。  
2つの領域を横断し、美術の豊かさを伝える。  
河内 啓成  
(教育学部 学校教員養成課程 美術専門領域 准教授)

16 学校の問題は答えが出ないものばかり。  
対話しながら前向きに考え続けたい。  
田島 愛里  
(教育学部 教育学専門領域 2年)

18 創立以来こだわってきた「先尾翼型」が、  
悲願を果たし琵琶湖の上を飛んだ。  
野元 優海  
(理工学部 機械工学EP 2年)  
山崎 董  
(経営学部 経営学科 2年)

20-21

### 横浜国大の名物授業！

マクロ経済学1・2  
藤生源子 (経済学部/国際社会科学研究院 教授)

化学・生命基礎実験Ⅰ 分析化学実験  
小久保 尚 (理工学部/工学研究院 講師)

環境共生フィールド演習  
山本 伸次 (都市科学部/環境情報研究院 教授)

22-24

### 横国生のオン&オフ事情

22 CASE\_01  
実験とサークルで充実！ 理工学部 坪井一馬さん

23 CASE\_02  
講義や実習に全力投球！ 都市科学部 湯本莉衣さん

24 CASE\_03  
体育会ラクロス部に所属。 経営学部 山藤風花さん

25

### YNU NEWS Vol.9

本学に在学する学生の多くは「デジタルネイティブ」と言われる世代です。

生まれた時からインターネット社会が存在したこの世代の学生たちは、

デジタル技術を抵抗なく自然に使いこなす能力を備えています。

彼らの多くはインターネット上でさまざまな情報や

人と接した経験をもつため、世の中には多様な価値観が存在し、

そのどれもが尊重されるべきだということを感覚的に理解しています。

本学では、数理・データサイエンス・AI 教育を推進・強化し、

学生たちのデータに対する感性と解析・分析力、

倫理観を一層深化させ、成長し続ける持続可能な社会、

誰一人取り残さない社会の実現を牽引する人材の育成に取り組んでいます。

広報委員会 委員長(理事・副学長)

泉 真由子

### 横国刻々 第9号

2025年2月 発行

編集・発行  
国立大学法人横浜国立大学  
〒240-8501  
横浜市保土ヶ谷区常盤台79番1号

編集ディレクション  
立古和智、田中智子 (fridge Inc.)

編集・執筆  
田中智子、江森和久 (fridge Inc.)

撮影  
榊 智朗、橋本千尋

イラスト  
中尾 悠

アートディレクション  
江原レン (mashroom design)

デザイン  
江原レン、時川佳久、浅野彰浩  
(mashroom design)

製本印刷  
TOPPANクロレ株式会社

お問い合わせ  
横浜国立大学  
総務企画部 リレーション推進課  
TEL 045-339-3027  
FAX 045-339-3034  
URL www.ynu.ac.jp

FROM NOW ON,

# これから

## 日本が目指すべき未来社会像 「Society 5.0」<sup>\*</sup>の実現に向けて

※内閣府が第5期科学技術基本計画において提唱した概念。「サイバー(仮想)空間とフィジカル(現実)空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」としている。



横浜国立大学  
副学長 (教育・国際担当)  
田名部 元成  
TANABU Motonari

「知の統合型大学」を目指すにあたり、どのような取り組みをお考えでしょうか。

経済学部と経営学部の連携によるデータサイエンス教育や、法学・政治学をベースに経済・経営学を学ぶプログラム、また理工学部1～3年生が最先端の研究に参加できるプロジェクトなどを用意しています。早い段階から研究の面白さを知り、興味を持って課題に立ち向かえるような人材育成を目指しています。

— 今後さらに強化していく教育分野などについてお聞かせください。

情報処理推進機構「DX白書2023」によると、DXを推進する人材は数も質も不足していることが明らかになっています。また今後はAIと学問のコラボレーションも推進されなければなりません。こ

のようなことを背景に、理工学部では数物・電子情報系学科の機能強化を図り、特に情報工学教育プログラムの募集人員を大幅に増やします。

— 全学部生が対象の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(YOKOHAMA MDAプログラム)」導入の経緯と今後の展望をお聞かせください。

「数理」「データサイエンス」「AI」はデジタル社会の基礎知識、いわば「読み書き・そろばん」です。すべての学生が身につけ、研究や仕事の場で道具として活用できることが望まれます。リテラシーレベルは2022年度、応用基礎レベルは2024年度に文部科学省より優れた教育プログラムとして認定を受けました。今後、理工系以外の学部・学科生の履修も促していきます。

# を

横浜国立大学は、新たな社会・経済システムの構築やイノベーションの創出、科学技術の発展に資する「知の統合型大学」をあるべき将来像として描く。そして、社会の抱える複雑な課題の解決に協力して取り組む資質・能力を有する人材を育成するために、社会と連携した教育を展開している。今号ではその実践的なプログラムを紹介する。

# これから

FROM HERE

→ ICTの活用で、不登校支援はできるのか

プログラム名

GIGAスクール構想 —メタ・バースの活用—

教育学部

メタ・バース（インターネット上の仮想空間）やVR（仮想現実）を活用し、不登校の子どもたちが安心して学べる場所の創造を目指す教育学部。多様な知の融合による横国らしい創造的なプロジェクトに迫る。



探 求 の プ ロ セ ス

実際にメタ・バースを作り、体験した中学生からの感想をもとに課題を抽出。ホームルームや授業での活用方法や、遠隔地からの支援方法などを検討する。学生主体で多様な学びの環境を創造することを目指す。

STEP 1

- ①VRやメタ・バースを体験
- ②自分たちで自分の居場所（メタ・バース）を創造

STEP 2 (現段階)

- ③メタ・バースの活用についてアンケート調査・分析
- ④大学生と中学生が協働しながらルールを決めて運用



「MetaLife」(株式会社バンド)を活用している様子

STEP 3

- ⑤遠隔地からの支援・活動の継続
- ⑥学生の参加が持続可能な構造の構築

これからを、ここから。  
FROM NOW ON, FROM HERE



教育学部 学校教員養成課程  
美術専門領域  
総合学術高等研究院  
生物圏研究ユニット  
生物文化多様性ラボ  
YNU里山ESD Base  
教育学部ESD GIGAスクールWG

河内 啓成 准教授  
KAWACHI Keisei  
専門：絵画・版画・美術教育

自らの手でオルタナティブな学び場を創造

メタ・バースを活用したオルタナティブスクールが、不登校の子どもたちの学ぶ機会につながれば——。「メタ・バースやVRゴーグルを活用した不登校支援」に取り組む教育学部の河内啓成准教授は、活動の狙いを「不登校支援という実践を通して、学校環境におけるVRやメタ・バースの活用可能性を明らかにすることだ」と語る。2022年頃にスタートしたこの取り組みは、愛川町教育委員会指導主事を務める教育学研究科卒業生から「不登校の支援教室と大学生の連携ができないか」という相談を受けたことをきっかけに実現。これまで学生たちは中学生と一緒に、スマホやタブレットで居場所（＝メタ・バース）を創造し、そのワールド内で交流を深めてきた。現在は、協働でワールドの活用時間やコミュニケーションの取り方など、運用ルールを決めている段階だ。

「不登校の子が抱える不安や意識は、簡単に解消できるものではありません。だからこそ小さなステップを積み重ねるしかない。交流の中で、『大学って面白いよ』『創作って楽しいよ』『社会にはこんな希望があるよ』と興味関心が外に向くよう、根気よく語りかけています」

メタ・バースやVRを使った学びは、不登校支援のみならず、地方と都市部の格差解消をはじめ、災害や救助、修学旅行の事前学習の

VR体験など幅広い使い方が可能なのではと河内准教授は語る。

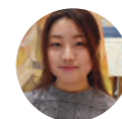
実践的チャレンジのできる学生に

この取り組みは、教員を目指す学生にとっても非常に良い機会になっていると河内准教授は言う。

「デジタルネイティブ世代の学生たちにとって、ICT活用は基礎的な技術として定着し始めています。一方でインターネットへの依存や情報の偏りという課題も散見される。そんな中で、実際に不登校の生徒たちと接し、彼らの思いを感じ取って自分ごととして考える経験は、教員となった際の対応力につながっていくはずだ」

一連の活動において学生は、アイデアの創出から実験や実践、振り返り、ブラッシュアップを繰り返す。これは教員が授業をデザインし、運営する際の思考と同じで、より実践的チャレンジができる学生の育成へとつながっている。

「メタ・バースによるオルタナティブスクールの実現は、不登校解消に直結するわけではありません。それでも、悩んでいる子どもたちが多様な専門を学ぶ大学生と出会うことで、人生に希望を持ってほしい。今後さまざまな分野の知識と技能を有機的に反応させ、多様な知の融合による横国らしい創造的なプロジェクトにしていきたいと考えています」



石田 英恵  
ISHIDA Hanako  
教育学部  
美術専門領域  
2年

未来の教育のための発見を

メタ・バースで子どもたちが楽しそうにいきいきと創作する姿に、現実世界では難しかった救いや可能性を感じています。最初はうまくコミュニケーションが取れるか心配でしたが、明るい子が多く、不登校児に抱いていた印象が変わりました。今は、VR酔いやタイムラグなどを改善している段階です。自身にとっても、ICT活用力が鍛えられると同時に、子どもたちに向き合い何ができるのか考える、とても貴重な経験になっています。この取り組みは不登校だけでなく、体の弱い子や発達特性のある子など、多様な子どもの可能性を広げる支援活動です。だからこそ、「ちょっとした発見」が子どもたちのより豊かで安心できる生活に結びつく実感しました。これからも細かな発見に気づけるようにアンテナを高くし、未来の教育の役に立てよう尽力したいと思います。



→ 経済学×データ統計分析で即戦力を養う

プログラム名

# 経済学部データサイエンス教育プログラム Data Science Education Program – Econ.

## 経済学部

経済学をベースとした統計分析能力を身につけ、現代社会のニーズに応える人材を育成する DSEP-Econ。社会データサイエンティストの輩出を目指す、ユニークな教育システムを紹介する。



国際社会科学研究院  
**相馬 尚人** 准教授  
SOMA Naoto  
専門：マクロ経済学・金融政策・財政政策

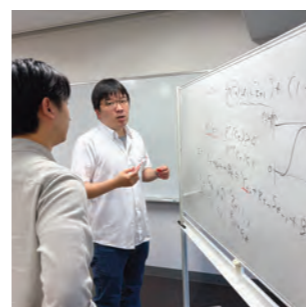
### データを意思決定の根拠に

社会のDX化が急速に進む中、2021年に経済学部はデータサイエンス教育プログラム（以下、経済学部 DSEP）を新設した。その狙いについて、国際社会科学研究院の相馬尚人准教授は次のように語る。

「現代社会が求めているのは、データの統計分析ができる上に、そのデータをエビデンスとして適切な判断や意思決定に生かせる能力です。このふたつを持つ人材を育成する教育プログラムが経済学部 DSEP です」

その学びの特長は、経済学とデータサイエンスの融合にある。授業では経済理論や経済政策の知識と同時に、プログラミング言語や統計学も学び、「経済理論に基づいたデータの解釈力」を磨く。

「高度な統計分析手法があっても、そのデータがどのように人々の意思決定にむすびについているかを理解できなければ、正しい判断はできません。逆にデータ分析に通じていなければエビデンスの意味を理解できないこともあります。両方を兼ね備える経済学部 DSEP では、経済学の知識をもって事象の因果関係を理論的に整理し、データの解釈力を高めることで適切な結論を導き出す人材を育成できる。それが大きな強みです」



社会ニーズに  
応える力を  
備える

### 5年間で学士号と修士号を

経済学部 DSEP は、大学教育では珍しい「5年一貫教育」を採用している。一般的には、学部4年間と大学院修士課程2年間の計6年間で専門性を身に付けるが、経済学部 DSEP ではそれを1年短縮。5年間で学士号と修士号を取得できる。

「学部3年から大学院修士課程の授業を前倒して受講し、5年間で修士号を取得、卒業できます。効率的に学べるカリキュラムを組み、いち早く優れた人材を社会に送り出せるようにしました」

卒業後に活躍できるフィールドは広い。経済学部で修得できるデータサイエンスの活用範囲は多岐に渡るからだ。例えば、政府の景気対策や地方自治体の予算配分、企業の市場戦略、個人の投資活動など、今や社会の多種多様な意思決定の場面において、「経済学的に解釈されたデータの活用」は欠かせないものとなっている。

「社会に出る前に、データサイエンスの技能を身に付けて修士号を取得することは、学生にとって大きなアドバンテージになるでしょう。来春には経済学部 DSEP の一期生が社会に羽ばたき、後輩たちもその後に続きます。引き続き、経済学部 DSEP は現代社会で活躍できる人材を輩出していきたいと思っております」

## 学びのプロセス

- 1年 経済学とデータサイエンスの基礎を学ぶ。
- 2年 経済学とデータサイエンスの基幹的な科目を履修する。
- 3、4年 「経済数量分析」分野を主専攻として、発展的な学習に取り組む。
- 5年 一貫教育によって修士の学位取得を目指す学生は、3年から大学院共通科目を受講できる。

### 経済学部DSEPのカリキュラム

1	2	3	4
<b>データサイエンス・リテラシー科目</b> データサイエンス・リテラシーⅠ、Ⅱ ↳ 基盤的なリテラシーの修得	<b>データサイエンス・ベーシック科目</b> ミクロデータサイエンス、マクロデータサイエンス、数理統計、経済数学、経済統計、計量経済学など ↳ データサイエンスへのアプローチを修得	<b>データサイエンス・コア科目</b> 中級ミクロデータサイエンス、中級マクロデータサイエンス、中級数理統計、中級計量経済学、中級経済統計、中級ゲーム理論など ↳ より高度な経済分析を行う	<b>産学連携科目</b> データサイエンスの基本的スキルを、実際の経済事象の分析に応用 ↳ 現場で活用できる分析能力を育成する



**坂井 海紀**  
SAKAI Minori  
経済学部  
経済学科DSEP  
4年

### 早期から専門性を高められる

中学生の頃から経済と鉄道データの分析が好きで、「5年一貫教育」にも魅力を感じ、経済学部 DSEP に入学しました。1年から経済学部科目と並行して、プログラミング言語を履修。2年には統計学も学び、実際のデータを使用して、データ分析のスキルやエラーへの対処方法を身に付けました。未経験のプログラミングには苦労しましたが、新しい技術（関数やパッケージなど）を習得した時には、RPGで武器を手に入れたようなワクワク感がありました。3年からは大学院の授業を履修し、ゼミでは俳句を自動生成するAIを開発。4年では授業や研究アシスタントを務めることで自身のスキル向上を図っています。来年以降も大学院の学びの中で自分の武器を増やし、より高い対応力を身につけたいです。将来的にはデータ分析に関わる仕事に就ければと考えています。



## → データサイエンス力で新たな価値の創造を

プログラム名

# 経営学部データサイエンス教育プログラム Data Science Education Program – Biz.

## 経営学部

データサイエンス力を武器に活躍する、次世代のビジネスリーダーを育成するDSEP-Biz。国公立大学の経営・商学部で初となった“データサイエンス教育プログラム”は今、大学内外から高い関心を集めている。



## 学びのプロセス・特徴

- 1年 少人数ゼミナールで課題解決の力を養いながら、経営学とデータサイエンスの基礎を学ぶ。
- 2年 1年生との共同プロジェクトでリーダーシップの育成を目指す。ゼミナールに加入し、経営における自らの専門領域を確立。
- 3、4年 インターン、企業との連携講義でより実践的な学修に取り組む。経済学部同様、5年一貫教育によって修士の学位を取得できる。

### ●実践に重きを置いたビジネス・リーダーを育成する

プロジェクトベースの少人数ゼミナール  
データサイエンスに携わる企業との連携講義  
インターンシップなどでの実践

### ●身につけられる3つの力

- ①データ分析手法を理解し、道具として使う力
- ②困難な課題を解決できるスキル
- ③経営課題を見抜く高度なビジネス知識

これからを、ここから。  
FROM NOW ON, FROM HERE



国際社会科学研究院  
鶴見 裕之 教授  
TSURUMI Hiroyuki  
専門：マーケティング・  
マーケティングリサーチ

### 実践に重きを置いた力を養う

データに基づいた戦略立案ができ、リーダーとして新たな価値を創造する人材の輩出を目指し、2021年にDSEP-Biz.を新設した経営学部。Society 5.0時代のビジネスを生き抜く人材を育てる“データサイエンス教育プログラム”に中心的に関わる鶴見裕之教授は、設立の背景をこう語る。

「Society 5.0の実現に向けて、データがビジネスを駆動する時代です。変革をもたらすのは、データサイエンティストを率いてビジネスを推進するリーダー。DSEP-Biz.ではデータ分析の専門知識や経営学、リーダーシップを身につけることで、あらゆる産業で進むDX化の中で、新たな価値を創造し活躍する人材を育てていこうとしています」

プログラムでは、入学直後から始まる少人数制のプロジェクトベース型ゼミ「データサイエンス・ゼミナールI・II」をはじめ、企業との連携講義やインターンシップなど、実践に重きを置いた学びが充実している。学生はビジネスの現場を想定した実践型プロジェクトで試行錯誤する中で、データ分析手法を理解する。その上、課題解決スキルと経営課題を見抜くといった、ビジネスに欠かせない能力も獲得。“データ分析を使いこなす力”の獲得を図っていく。

2024年度は、DSEP-Biz.の初年度生が

卒業を迎える。「4年間の学びを通して高度なデータ分析能力と使いこなす力を習得し、主体的にプロジェクトを推進できるようになった彼ら。そのデータに基づいた戦略立案やプレゼンテーション、課題解決能力やチームワークは、まさにDSEP-Biz.が目指す人材像そのものです」と鶴見教授は胸を張る。

### データサイエンスで未来を変える

今後の日本企業においては、データ戦略を担い、意思決定を支援するCDO(チーフ・データ・オフィサー)の重要性が高まっていく。鶴見教授は、「DSEP-Biz.で学んだ学生たちは、CDOを経てCEOになり、データドリブンな経営を推進し、企業の競争力強化や新たなビジネスモデルの創出に大きく貢献できるはず」と期待をかける。

卒業生に望むのは、ビジネスの成功の先にある社会課題の解決だ。「貧困や教育格差、環境問題など、問題が複雑化し従来のアプローチでは解決が難しい課題に対峙してほしい、その力を養っている」と鶴見教授。

「データサイエンスは客観的に分析し、解決策を導き出す強力なツールとなり得ます。ビジネスの成長と社会貢献を両立させ、持続可能な社会の実現に貢献し、未来を創造する人材がここから生まれることを願っています」



松原 健人  
MATSUBARA Kenji  
経営学部  
DSEP  
4年

### 数々のコンペで実践的な学びを

小さい頃から数字とゲームが好き。特にゲームキャラクターの特性を踏まえて対戦データを分析し、戦略を立てることに夢中でした。次第に統計学に興味を抱くようになり、データ分析から経営戦略を導く経営学部DSEPに入学。DSEP-Biz.での4年間は、新たな学びと挑戦の連続でした。1年には野村総合研究所のマーケティング分析コンテストに、2、3年ではマンション価格予測のAIコンペティションやNEXCO中日本など企業からの課題に挑戦。卒論を含め、データを起点にビジネス提案まで行う数々のプロジェクトを通して、実践的なスキルを磨き続けました。卒業後はコンサルティング業界に進みます。理系の博士号取得者らに負けたくないよう研鑽を続け、経営者の参謀役となって、誰もがデータ分析を活用できる社会の実現に貢献したいと考えています。



→ 最先端の研究に触れるチャンスに学部生に

プログラム名

# ROUTE

## Research Opportunities for Undergraduates

### 理工学部

「ROUTE」は、理工学部の1～3年生が各研究室で実施している最先端の研究に参加できるプロジェクト。早い段階から研究の面白さに触れられることから、学部生の学習意欲を高め、成長を後押ししている。



### 研究のプロセス

最先端研究に参加する機会を提供するROUTE。学部1年から研究の面白さを知ること、学部の講義にも一層興味を持って取り組むことができる。

#### STEP 1

興味、関心がある分野から研究テーマを選ぶ

#### STEP 2

先輩や大学院生の力も借りながら最先端研究に挑戦

#### STEP 3

年度末のROUTE成果発表会では優秀者の表彰も

#### さらにこんな支援も

**iROUTE** 指導教員の海外共同研究先において研究を体験するプログラム

**学部横断ROUTE** 理工学部の学生と他学部の学生が協力し、研究に取り組むプロジェクト

**ROUTE plus** ROUTE研究をさらに推進するため、審査結果に応じて研究経費の一部を支援する仕組み

これからを、ここから。  
FROM NOW ON, FROM HERE



工学研究院  
**福田 淳二** 教授  
FUKUDA Junji  
専門: 生物工学・再生医療

#### 出る杭はどんどん伸ばす

ROUTEは、理工学部の各研究室が提示した研究テーマから、学部1～3年生が自分の興味がある研究に、早くから参加できるプロジェクトだ。工学研究院の福田淳二教授は、その始まりを次のように振り返る。

「ROUTEをスタートした2014年当時は、高校による理数教育の重点化が進み、高校時代に研究に取り組んだ経験のある学生が、少しずつ入学してくるようになっていました。すでに研究への強い意欲を持つ学生、いわば“出る杭”を伸ばそうという思いから、ROUTEを導入しました」

スタートから10年、ROUTEは文部科学大臣賞をはじめ数々の賞を受賞するなどの研究成果を残してきた。参加学生からは「研究に携わることで、講義への興味や理解が深まった」「ROUTEの経験が進路選択の原点になった」「研究で受賞したことが自信になった」「ROUTEが入学の決め手だった」などの声に、福田教授もプロジェクトへの確かな手応えを感じている。

「学生たちが受賞したり、論文発表や研究留

学をしたりする様子を見てみると、“出る杭”を伸ばす大切さを実感します。興味のあることに夢中で取り組み、知的好奇心を満たしながら、これからも研究を楽しんでもらいたいですね」

#### 自ら研究を楽しみ、世界にはばたく人材へ

ROUTEには研究費用を支援する3つのサブプログラムがある。ひとつ目は、留学や国際学会での発表を支援する「iROUTE」。取り組みの延長として、海外から教授を招いて講義を実施したり、国際共著論文を執筆したりすることもある。次に、他学部との協働を支援し、ビジネスコンテストへの参加や教材開発などを旨とする「学部横断ROUTE」。そして、学生が自ら研究計画書を提出し、研究費を確保する「ROUTE Plus」だ。

「ROUTEが大切にしているのは、学生の主体性を育て、引き出すこと。3つのサブプログラムを活用し、異なる分野を見渡す広い視野を持って、国際的に活躍できる人材を育てていきたい。これからも、自ら手を挙げる学生には、力の限りサポートをしていきたいと考えています」



#### 注目の取り組みが2023年にスタート!

2021年度から数理・データサイエンス・AI教育プログラム(YOKOHAMA MDAプログラム)リテラシーレベルを実施していますが、2023年からは、さらに高度な教育を行うべく、YOKOHAMA MDAプログラム・応用基礎レベルを全学部生対象に開始しました。専門分野は異なっていますが、それぞれの学生が興味をもって取り組めるような内容のプログラムを開発しています。数理・データサイエンス・AIは、今後のデジタル社会の基礎知識であり、すべての学生が身につけておくべき素養。あらゆる学部の皆さんが受講し、課題を解決するための実践的なスキルを身につけることを願っています。



環境情報研究院  
**多々見 純一** 教授  
TATAMI Junichi  
専門: セラミックス

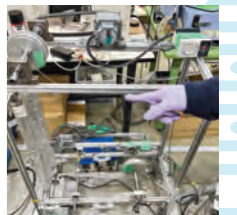


**道上 泰地**  
MICHIGAMI Taichi  
理工学部  
機械・材料・海洋系学科  
材料工学EP  
3年

#### 1年から先輩に教わり成長する

「高校の時から興味があった研究分野に早く携わりたい」との思いで、1年の秋からROUTEに参加しました。1、2年は先輩の研究を手伝いつつ、実験の手順や安全な作業方法を習得。3年では、先輩から引き継いだ「分解・治癒機能を有するZrCエージントを界面層とした長繊維強化セラミックス」の研究を進めています。

参加当初は分からないことばかりでしたが、必死に論文を読み漁り、知識を蓄え、常に「自分の頭で考える習慣」が身に付きました。先輩方からは「実験をする以前に、仮説設定や目的の明確化が重要」と学び、自らの研究活動にも活かしています。研究の面白さを感じるのは「壁を克服する道筋が見えたとき」。今後は、セラミックスのリサイクル方法を探究し、より良い地球環境づくりに貢献したいと考えています。



## → 複雑に交錯する都市の課題に向き合う力を

プログラム名

# 都市科学A・B・C・S

### 都市科学部

これからの都市のあるべき姿とは。この問いへの答えを見つけるべく、都市科学部では「都市科学A・B・C」で都市を科学する基礎力を身につけ、「都市科学S」で複眼的な分析力と発信力、文理融合の視点を獲得していく。



都市科学部  
藤掛 洋子 学部長  
FUJIKAKE Yoko  
専門：文化人類学・開発人類学・ジェンダーと開発・パラグアイ地域研究

### 都市を科学し、共生社会を構築する

一極集中的に拡大し続ける現代の都市は、さまざまな社会課題を抱えている。地域格差や過疎化、災害などへの対応のほか、多様性を認めるまちづくりも不可欠だ。人類が直面するこれら「都市の課題」に対峙するため、2017年に新設されたのが「都市科学部」。藤掛洋子学部長は、「都市とは、人と人、人と自然がつながり形成されている。複雑に交錯する社会問題に向き合うには、グローバルとローカルの視点、文理融合の視点が不可欠です」と語る。

都市を科学する“視座”を高めるため、都市科学部では「都市科学A（グローバル・ローカル）」、「都市科学B（リスク共生）」、「都市科学C（イノベーション）」で都市科学の基礎を学びながら、歴史や文化など社会的要素への理解も深めていく。国内外におけるフィールド実践も活発で、人々に寄り添い、実践知を獲得していく仕組みがある。

「都市科学A」では、都市の現実を多角的、多面的に学び、その中で、社会変革を生み出す力のベースとなる複眼的思考を、「都市科学B」では、豊かさを求める営みと表裏一体で生じるリスクについて知り、バランスをマネジメントしながら、価値を創造する力を醸成していく。「都市科学C」では、これらを分野横断的に統括し、学びを深めていく。2024年度は地方・

地域に着眼し、地方で活躍する人物を講師に迎えた。

藤掛学部長は言う。「首都一極集中や人口減少地域などにおける社会課題の解決に向けて、地方からのイノベーションを創出するために、大学も貢献していくことが重要だと考えます」

### 柔軟な思考とイノベーションを起こす

学部の新設以来開催している「都市科学シンポジウム」では、2021年度から学生発信のポスターセッションを実施。2023年度には、横浜の地域課題やベトナム、アメリカの都市問題などをテーマに、フィールド実践を踏まえた学びの成果を披露した。セッションを通じた学生たちの成長はめざましく、2024年度からは「都市科学S（ソーシャルプラクティス）」として科目に組み込んでいる。「他学科や外部の研究者や実務家と連携し能動的に取り組む中で、課題解決能力が育つほか、複眼的思考を養うきっかけになっている」と話す藤掛学部長。

「複数あるものの見方を理解し、当事者とともに課題を解決していく力が不可欠な時代。多くの矛盾が内包されている都市の諸課題に向き合うためには、柔軟な思考とイノベーションを起こす力、他者と協働できる力が必要です。差異を超えて都市を科学し、ともに共生社会を構築していきましょう」と未来を語る。

文理融合の  
視点をもって  
社会を捉える



パラグアイでの受益者女性と学生とのワークショップ

## 学びの特色

都市の課題を知りその解決のために、文理融合の視点から教育研究に取り組んでいる。都市科学A、B、Cは1年の必修科目。

都市科学 **A**  
(グローバル・ローカル)  
「グローバルとローカルの接点としての都市」について理解する。

都市科学 **B**  
(リスク共生)  
都市づくりを考える基盤となる「リスク共生」の知識体系の概要を理解する。

都市科学 **C**  
(イノベーション)  
重層的・多面的な観点から都市や地域・地方を捉えなおすことを通じ、多様なイノベーションの在り方を理解する。

都市科学 **S**  
(ソーシャルプラクティス)  
都市科学A、B、Cでの学びを基盤として秋学期に開催。都市科学シンポジウムと学生発信のポスターセッションからなる。



柳澤 美那  
YANAGISAWA Mina  
都市科学部  
都市社会共生学科  
2年

### 「都市を科学」する魅力

「都市を科学する」とはということなのか。入学前は漠然としかわからずにはいましたが、今では「都市」をベースに多様な学問が広がっているのだと理解できました。社会や都市の基礎をはじめ、建築やインフラ、防災のほか、芸術や思想などにスポットを当てた都市を科学する授業で、都市の複雑さを知るとともに、その奥深さに惹きつけられました。ここで鍛えられるのは、総合的かつ多面的な学びを通じ、文章を読み解き、論理的な思考に基づいた実践力です。昨年参加した「都市科学シンポジウム」のポスターセッションでは、実際に訪れたアメリカ・ポートランドの都市機能について発信。他学科の学生との交流に刺激を受けつつ、「ポートランドに行ってみたい!」との声を得ることができました。変化する社会の中で、これからも人や都市に向き合っていきたいと思えます。





# YNU PEOPLE

挑戦し続ける横浜国立大学の「人」。

横国が誇る研究者をクローズアップする、〈YNU MAESTRO〉。学生たちのベンチャー精神に迫る、〈VENTURE SPIRIT〉。インタビューを通じて、横国の“今”をお届けする。

YNU PEOPLE

YNU MAESTRO



教育学部 学校教員養成課程  
美術専門領域 准教授

河内 啓成

KAWACHI Keisai

「美術家」と「教育者」。  
2つの領域を横断し、  
美術の豊かさを伝える。

## 3 KEYWORDS

河内先生をひもとく  
3つのキーワード

1



鑑賞する角度に応じて  
違った絵に見える

見る角度を変えると、光の屈折により異なるイメージが浮かびあがる作品『防毒面具女子』。2011年の東日本大震災以降、非日常の象徴であるガスマスクと女子高生を組み合わせた作品を多く生み出してきた。

2



手漉き作業の様子

生物文化多様性を肌で学ぶ  
ワークショップを展開

本学にある里山の資源を活用し、生物文化多様性を考える教育を実践している「里山ESD研究拠点」。小学4～6年生を対象とした2024年の連続講座「里山未来工房」にて、河内先生は「和紙すき体験」や「絵の具づくり」のワークショップを行った。

3



『未来につなげるESD—持続可能な社会を里山から考える』倉田薫子 編、横浜国立大学里山ESD研究拠点 著 大修館書店

メンバーの先生たちを  
タンポポや金魚の絵で表現

「里山ESD研究拠点」の取り組みを紹介した本書で、表紙のイラストを担った河内先生。拠点メンバーである理科・国語・美術の先生方を、植物や生物にたとえて表現した。拠点代表の倉田薫子先生はタンポポ、河内先生自身は金魚の姿をとっている。

### 「常識」と「見ること」を問う 角度によって異なる絵画表現

ガスマスクをかぶった女子高生の顔に、うかびあがるドクロという死のイメージ。その真正面に立つと、ゴーグルに塗り込められた塗料が反射し、決して目をあわせることはかなわない……。生と死、見えるものと見えないもの。相反する要素が同居する代表作『防毒面具女子』には、河内先生の追求する表現が強烈ににじむ。見る角度によって違ったイメージを生み出す、それが先生のテーマだ。

「絵画は正面から見るものというのはあくまで社会の暗黙のルールであって、人が動くことによって変化する絵があってもいいはず。それは絵画であると同時に、鑑賞者の『見ること』への信頼を揺さぶり、何らかの気づきを生む装置になるのではないかと。そんなことを考えながら作品を作っています」

同じものを見ているはずなのに、一人ひとりが違う印象を持つことがある。それは、まるでカメラのレンズのようにイメージのポケヤブレを生み出す「見ること」の不思議さと難しさに起因するのではないかと。そんな人間の知覚への関心が、既成概念にとらわれない画材を選択させる。抽象絵画で視覚的效果を狙って用いられるパール塗料や、ホログラムグリットを具象画に転用するなど、さまざまな素材・手法を大胆に取り入れ、20年以上にわたり独自の表現を追求してきた。

### キャンパスの里山環境を生かして 豊かな発想力を養う

美術教育者としても20年超の実績をもつ河内先生。現在はESD（持続可能

な開発のための教育）の観点から、生物多様性学習と創造的活動を掛け合わせた教育的効果をテーマとしている。

「美術教育は領域横断的な学習との親和性が高く、新たな価値を創造できる可能性を感じています」

その活動の一つが、小学生を対象にした連続講座「里山未来工房」だ。本学の生物文化多様性ラボで理科教育の先生たちと協働して行っているもので、学内の里山環境を活かした和紙づくりや絵の具づくりにも取り組むユニークなプログラム。「子供たちには、素材を知ればなんでも作れるんだと実感してもらいたい」と願う。

「何かを表現したい、作りたいと思ったときに、パッケージされた美術キットに手を伸ばすのではなく、「自分が目指す表現にはどんなアイテムが必要で、それはどうすれば作れるんだろう」と思考してほしい。それがゼロから何かを生み出す発想力を養うのだと考えています」

自分ですいた和紙を使い、洋紙と綱引きをさせて強度の差を感じたり、揉むことで表情が変わって再利用できる特性を体感したり。触れ、確かめ、思考するプロセスを通じて子供たちの眼差しは着実に変化。いろいろな素材を混ぜて絵の具を作り始める子、あるいは発色の違いから材料を洞察する子。里山未来工房では新たな芽が育ち始めている。

### 答えはなく、すべてが正解 本当の美術教育を子供たちに

精力的に活動する河内先生を突き動かすのは、日本の美術教育への危機感だ。

ある民間の調査によると、近年は小学生から中学生にかけて美術への苦手意識を強くする子供が大幅に増加していると

いう。上手く描けないから、周囲に下手だと思われたくないから……。 「すごく勿体ないこと」と河内先生は胸を痛める。

「美術教育とは、アーティストを育成することではありません。束縛から抜け出し、自由な発想で物事を捉えられる素地を養うことにこそ、その目的があります。ゆえに他の教科とは異なり、美術には答えがない。むしろ自分で感じたことすべてが正解になる、稀有な魅力をもった学問なのです。ですから、上手いか下手かといった物差しを当てるのではなく、子供たち自身が出した答えに自信が持てるよう導いていきたい。それが私たち美術教育者の役割だと思っています」

そう語る河内先生自身も、かつて美術の成績評価に苦しめられた一人だ。

「特に中学時代はさんざんなもので、自信を失いかけたこともありました。でも、何かを作って表現したいという気持ちだけは失わず、それを形にする技法や材料を模索し続けてきたんです。試行錯誤を重ねて歩んできたからこそ、伝えられる美術の楽しさがあると信じています」

日頃から考えているのは、失敗を恐れずにチャレンジできる教育現場にすること。「子供たちが自分自身で楽しさを見出すために、いかに学びをデザインするか。それが今の大きな関心事です」

### PROFILE

兵庫県出身。専門は絵画、版画、美術教育。第49回関西二紀展清風堂賞、第22回市展『なら』市展賞、第23回市展『なら』市教育委員長賞、第24回上野の森美術館大賞展（賞候補）などの受賞歴を持つ。

**学校の問題は答えが出ないものばかり。  
 対話しながら前向きに考え続けたい。**

2015年の公開から9年経っても、各地で上映され、人々の心をつかみ続ける記録映画がある。田島愛里さんも、この作品に強く心をつかまれた一人だ。映画を起点にさまざまな経験を積み、着実に目指す未来へ進んでいる。



教育学部 教育学専門領域 2年

**田島 愛里**

TAJIMA Airi

**「彼らと同じ教室で過ごせたら」  
 小学校からの分離教育に疑問**

「みんなの学校」は、大阪市立大空小学校の実践を撮影した記録映画だ。高3の夏にこの作品と出会ったことが、田島さんの進路を決定づけた。

「大空小では、障害がある子もいない子も、みんなが同じ教室で一緒に学んでいま

た。これが本来の学校の姿であり、私たちが目指す共生社会につながるものなんじゃないかと思ったのです」

田島さんも幼い頃は、障害の有無で子どもを分離しない幼稚園に通っていた。「当時の幼馴染みと高校生のときに再会して、初めて障害があると知ったことも。でも、出会ったときから単に人と人として関わっていたので、診断名は関係な

かったんですよね」と振り返る。だが小学校に入学すると、さまざまな特性を持つ子どもは特別支援学級に隔てられ、なんとなく遠い存在になっていった。

「小学校では特別支援学級の子たちと交流する時間があつたのですが、そのときに、彼らを同じ教室の仲間だと見ていない自分を感じていました。関わる機会がなければ相手を知ることもできないし、

**MY MEMORY**



1 本学の教育文化ホールで開催された第7回「みんなの学校全国大会」の様子。



2 全国から集まった実行委員と、横国生で構成された学生実行委員のメンバーたち。



3 映画を初鑑賞した際のチケット。田島さんは現在も大切に保管している。



4 一般参加の2022年、当日ボランティアとして携わった2023年、実行委員を務めた2024年の大会チラシ。

無知は偏見につながりやすい。もし彼らとも同じ教室で過ごせていたら、何かが違ったんじゃないか。中学や高校でも差別について学ぶ中で、分離教育が偏見を生む一因なのではないかと考えるようになったんです」

**映画イベントの実行委員になり  
 台風にも負けず初の関東開催へ**

そんな折に見た「みんなの学校」は、田島さんに大きな衝撃を与えた。それまでは幼稚園教員になろうかとも考えていたが、目標を小学校の教員に絞った。さらに自主上映とワークショップを行うイベント『「みんなの学校」全国大会』が毎回開催されているのを知ると、田島さんはすぐに足を運んだ。1年目は一般参加者として、大学生になった2年目は当日ボランティアとして。そして3年目となった今年の実行委員会として、大学の仲間と共に主催者を務めた。

「大会の実行委員は、毎年有志が集まって担当しています。大学の同じ専攻の友達に声をかけたら、5人が快諾してくれました。会場には大学の教育文化ホールを借りることもでき、関東初となる全国大会開催が決まりました」

こうして、2024年の全国大会は9月1日に横浜で実施された。だが、当日は台風接近で交通機関にも影響が出る悪天

候。大空小初代校長の木村泰子さんも来場できず、ゲストトークは急遽オンラインで行われた。それでも会場には約140人の参加者が訪れ、とくに例年以上に中高生の参加者が多かったことは、田島さんにとってうれしい手応えとなった。

当日のワークショップにおける対話のテーマは、「みんなの学校ってなんだろう?」と「学校のみらいを考える」の二本立て。イベントの中で田島さんたちがとくに大切にしているのが、この参加者同士による対話の時間だ。

「学校現場には教員の力ではどうにもできない状況があり、問題はすぐに答えが出ないものばかりです。だからこそ、いろいろな立場の人が集まって、対話しながら前向きに考えていくことが大事なのだと思います。否定的なことばかり言っていたり、考えるのをやめたりしたら何も進みませんから」

**子どもたちの困りごとに向き合い、  
 よりよい環境を作る教員を目指す**

この日も、グループでの話し合いを経て、さまざまな意見が発表された。

「大人も子どもも、もっと『余白』が必要だという声がありました。別のグループからは『余裕』や『ゆるゆる』というキーワードが出ましたが、これらも言葉は違うだけで同じことを言っていま

すよね。みんながそう感じているんだなと実感できたり、複数のキーワードが重なってより深く納得できたりと、私自身もたくさんの気づきがありました。多くの参加者にも、同じような感覚を味わってもらえたのではないかと思います」

分離教育などの仕組み自体を変えたいなら、教育委員会や文部科学省に進んではどうか。そう勧めてくれた人もいます。だが田島さんは「学校にいるから見える子どもたちの困りごとに向き合っていきたい。それができるのはきっと、一番近くにいる教員だと思う。だから私は現場を目指したいんです」と力強く語った。

**About Us**

**「学校のみらい」を考える  
 自主上映と対話の集会**

映画「みんなの学校」に感銘を受けた有志が実行委員を務め、自主上映と対話を行うイベント。多様な子どもたちが同じ教室で学ぶ教育の意義や、学校教育のこれからを、対話を通して考えていく。

## 創立以来こだわってきた「先尾翼型」が、 悲願を果たし琵琶湖の上を飛んだ。

人力飛行機の飛距離と滞空時間を競う日本テレビ系列の長寿番組、「鳥人間コンテスト」。会場となるのは滋賀県の琵琶湖だ。1995年設立の歴史あるサークルが今年、鹿部の危機を乗り越えて、横浜から琵琶湖の上空に挑んだ。



理工学部  
機械・材料・海洋系学科  
機械工学EP 2年

野元 優海

NOMOTO Sukai

経営学部 経営学科 2年

山崎 董

YAMASAKI Sumire

### 失われた技術でサークルを再興し 鳥人間コンテストの出場を目指す

横浜AEROSPACEは、鳥人間コンテストへの出場を目的に設立されたサークルだ。だが最後に本戦に出たのは2014年。長いブランクに、コロナ禍の大会中止や活動自粛が追い討ちをかけ、技術の伝承は完全に途絶えてしまっていた。

その歴史を塗り替えたのが、機体の設計製作に携わった野元さんと、女性初のパイロットを務めた山崎さんたちだ。

2024年、サークルは10年ぶりに鳥人間コンテストへの出場を果たした。挑戦の理由を、野元さんは「ものづくりをしたかった。自分の名前が『すかい』なので、何かスカイっぽいことをしようと思って」と笑う。山崎さんは、旅客機のパイ

ロットである父に憧れていた。「私もパイロットになることを目指しています。でも、空を飛ぶ夢を学生のうちにここで叶えたかったです」と語る。

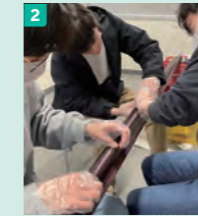
実はコンテスト出場に必要なのは、飛距離だけではないという。

「機体にも人にもテレビ番組の見どころになる特徴が求められ、事前書類審査も狭き門です。うちの個性といえば、

## MY MEMORY



1 自転車で坂道を登るほどの負荷をかけトレーニングを続ける。



2 機体の骨格となるカーボンパイプはカーボンシートを巻いての手作りだ。



3 琵琶湖畔、本番前の微調整が続く。



4 大空を舞う先尾翼型飛行機。記録は540mを超えた。「鳥人間コンテスト」の様子は公式YouTubeチャンネルで視聴できます。

やはり1995年の設立からこだわっている先尾翼型飛行機。この機体で出することに意味があると思いました」（山崎さん）

### 機体の素材も自作して節約、 操縦技術も体調管理も万全に

先尾翼型飛行機とは何か。野元さんは「普通、尾翼は後ろにあるものですが、それが前にあるのが特徴です。今年により変わった設計にして、今までの先尾翼に、さらに1本の補助翼を追加しました」と説明する。製作にあたっては、出場する大学が集まる技術交流会で相談したり、社会人OBに連絡を取ったりして、途絶したノウハウをかき集めた。資金もないので材料も工夫した。

「翼には軽量のカーボンパイプが必要ですが、高価なので自作しました。カーボンシートを幾重にも重ねて金属パイプで型を取り、先輩が残っていたピザ窯で焼くんです」（野元さん）

その間、山崎さんはハードなトレーニングに取り組んでいた。

「毎朝走ったり、ジムで筋トレしたりするのはもちろん、食事もすべて管理してベストな体重維持を心がけました。男性に比べて出力が小さい分、機体を軽くできるのが小柄な私の強み。筋肉をつけ過ぎて体重がオーバーしないよ

う、終盤は水1杯飲むのにも気を使っていました」

飛行機はパイロットの体重を基準に、必要なパワーや回転数を決めて設計されるもの。体重変化は深刻な問題にもなる。また、男性が乗る場合よりも5kg以上軽く作られた機体は風に煽られやすく、高い操縦技術も求められる。山崎さんはシミュレーターを使った操縦訓練も繰り返し本番に備えた。

### 「見たことのない形」が ベテラン解説者もうならせた

テストフライトでは、飛んだ瞬間に翼が真っ二つに折れた。コンテスト当日の機体審査では、炎天下の待ち時間で翼のフィルムが熱収縮してしまった。最後までハプニングに見舞われながら、彼らはその瞬間を迎えた。

琵琶湖の端のプラトホーム（機体発進場）から、山崎さんが乗った機体を、野元さんが虚空に向かって押し出す。機体は悠然と宙に浮き、しばらく進んで着水した。記録は540.33m。先尾翼型飛行機にこだわってきた横浜AEROSPACE史上、最長の飛距離だった。

「本当にきれいにまっすぐ、ふわあっと飛んでくれた。それを見たときには、やっぱり涙がこぼれました」（野元さん）

一方の山崎さんは操縦に必死で、あまり感動はなかったという。だがフライトを終えて仲間の元に戻ってみると、サークル生もOBも家族も泣いていた。

「いつも私のほうがお礼を言わなきゃいけないことばかりなのに、普段は寡黙な先輩まで、涙ながらに『ありがとう』って言うんです。それを見たときに、ああ、よかったなと実感が湧いて。おこがましいかもしれないけれど、みんなの思いに報いることができたと思えました」

結果は11位だったが、サークルは審査員特別賞を取った。ある解説者は「見たことのない形のものが飛んでいて、エンジニアとして感慨深かった」と評した。

山崎さんは現在、航空会社への就職を目指し、語学やインターン、筋トレに励んでいる。野元さんはコンテストへの再挑戦に向け、新たな機体を検討中だ。

### About Us

#### 1995年設立のサークル 横浜AEROSPACE

鳥人間コンテストへの出場を目的に設立された人力飛行機製作サークル。1995年以来、水平尾翼が前方についた特殊な機体で記録更新に挑んできた。学内の学生会館裏にある部室を拠点に活動中。

# 横浜国大の名物授業!

「横国ならではの学びが味わえる!」と、学生の間でも評判の授業があります。シラバスからは読み取れない、その魅力に迫ります。

## マクロ経済学 1・2

授業名

### 物価水準と失業率はどのようにして決まる?



授業内容について教えてください。

国内総生産(GDP)や消費、投資、利率、物価水準、さらに失業率は、どのように決定されるのか。マクロ経済学は国全体の経済活動を分析対象とする経済学の基礎科目のひとつです。通常、景気が拡大すると物価は上昇し、失業率は低下。一方、景気が悪化すると物価は下落し失業率は上昇します。こうした短期的な景気変動に対し、金融政策や財政政策がどのような影響を与えるのかを分析します。また、長期的な視点からも、経済がどのように成長あるいは衰退するか、人口増加や技術進歩が経済成長にどのような影響を与えるのかについて学んでいきます。

授業に対する学生の反応はいかがでしょう。

授業が終わった後に質問に来てくれる学生が多く、非常に嬉しく思っています。思いもよらない質問を受け、ハッとさせられることもあります。大学での学びとは、知識を蓄積するだけでなく、学んだことをベースに、新たな視点や考え方を自ら創り出すこと。単に学んだ内容を覚えるだけでなく、さらに一歩踏み込んで「それが本当に正しいのか?」と疑問を持つ姿勢が重要です。



氏名 藤生 源子  
FUJIO Minako  
所属 経済学部/  
国際社会科学研究院  
教授  
専門 経済動学・  
経済成長

マクロ経済学を学ぶことで、新聞やテレビで報道される経済関連のニュースへの理解が深まります。授業では、時事的な経済ニュースの新聞記事を取り上げ、学んだ経済理論を使って実際の経済の動きを分析する練習も行っています。

## 化学・生命基礎実験 I 分析化学実験

授業名

### 研究者に 欠かせない 思考の サイクルを養おう。



授業内容について教えてください。

化学・生命系学科における授業は「講義」、「実験」、「演習」の3つに分類されます。このうち最も時間数が多いのは座学の「講義」ですが、化学分野において「実験」は、3年生秋学期の研究室配属後に研究を進める上で、とても重要なものです。学生は授業を通じて実験技術を習得するだけでなく、その結果を解析し、何が明らかになったのかをレポートとして提出します。客観的かつ論理的な記述が必要なレポートの作成技術は、大学卒業後にも生かされるスキルです。この分析化学実験では、市販試薬の純度やミネラルウォーター中のイオン濃度の分析などを行っています。

授業に対する学生の反応はいかがでしょう。

学生は、当日に行う手順や原理などを予習して実験に臨みます。実験は2人1組で行うため、学生は実験操作やデータ解析などを通じて、パートナーと打ち解けていくことが多いようです。実験前には教員が学問的に重要な点や安全について解説。指導補助の大学院生が操作方法を説明する際も、学生たちは真剣に耳を傾けています。提出されたレポートは教員が事細かに採点し、「こんな観点から考察すると良い」といった、個々に応じたコメントを付けています。その内容を踏まえて、回を重ねるごとに学生がレベルアップしていく様子が感じられます。



氏名 小久保 尚  
KOKUBO Hisashi  
所属 理工学部/  
工学研究院  
講師  
専門 高分子化学・  
機能性有機材料

実験結果は、必ずしも理論値と一致するわけではありません。そして、不一致には必ず原因があります。仮説を立てる→結果から新たな可能性を探る→新たな仮説を立てる。このサイクルが実験の基本です。この思考回路をうまく回せると、将来優れた研究者になれるでしょう。

## フィールド演習 環境共生

授業名

### 自然、都市、環境へのまなざしが一変する。



授業内容について教えてください。

毎年4月に、環境リスク共生学科の新入生とはほぼ全教員が参加し、1泊2日の合宿形式で行う体験科目です。学生はフィールド研究の基礎や安全対策を実地で学びながら、学科教員の多様な研究分野を一通り見て回ります。屋外では、森林や地層、海を観察。室内では、社会系の入門講義でその分野の重要性や楽しさを味わい、工場や施設も見学します。環境リスク共生学科は研究分野がとても広く、教員の研究領域もさまざま。そのすべてを1泊2日で体験するのは難しいですが、都市・海・森林・地層・施設を見て回れる丹沢湖畔や三浦半島で実施しています。

授業に対する学生の反応はいかがでしょう。

学生にとっては野外実習や宿泊を通じて友人ができ、教員の顔と名前が一致する機会になっています。その後の講義や実習でも同級生と打ち解けやすくなるのか、大学に来るのが楽しくなると聞いています。夜は宿泊先で講義やバーベキューをしていますが、その際に教員から「19歳以下はお酒を飲んではいけません」といった話もします。大学生生活を送る上で大切なリスク管理にも役立っていると思います。



氏名 山本 伸次  
YAMAMOTO Shinji  
所属 都市科学部/  
環境情報研究院  
教授  
専門 地質学・岩石学・  
鉱物学

メインテーマは野外での安全対策ですが、学生には何より観察してあれこれ考える楽しさを味わってもらえればと思います。木に登ったり、地層をハンマーで叩いたり、海にザブザブ入る教員も。自然・都市・環境に対して「こんな見方があるのか」と知る、入門の機会となるよう心がけています。

# 横国生のオン&オフ事情

CASE\_01

## 実験とサークルで充実！ 理工学部 坪井一馬さん



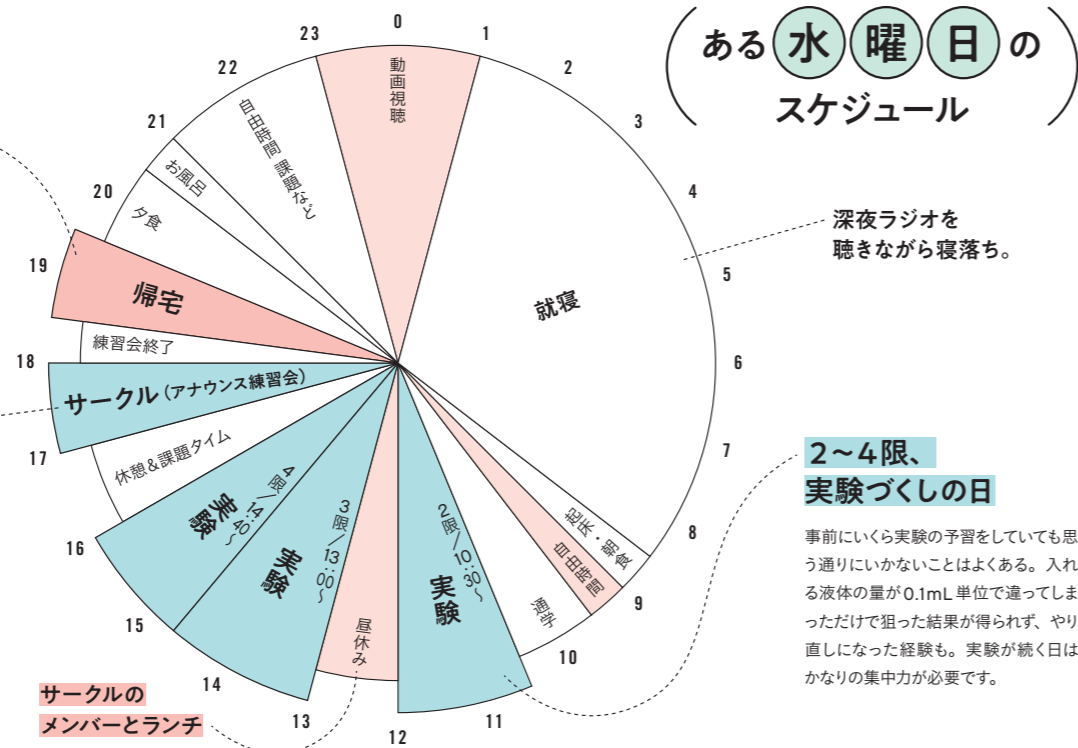
「化学系学生の必須アイテム」という白衣を着て、日々実験に取り組む理工学部の坪井一馬さん。放送研究会に所属し、学内外のイベントで司会者として活躍することもあり、アナウンスの練習に励んでいる。サークルでは番組制作にも注力。横浜市のコミュニティFM局やケーブルテレビ局の番組を制作・放送している。

### 移動中の過ごし方

普段はアプリでラジオや音楽を聴いています。中間・期末の試験直前には自作のまとめノートをスマホに取り込んでおいて、移動時間を使って何度も確認。直前まで追い込みます。

### アナウンス練習会

今は原稿を読む練習に力を入れています。先輩・後輩は関係なく、遠慮なく感想を述べるのがここでの決まり。いつもの雰囲気とは違い、練習会では少し緊張した空気が流れています。



CASE\_02

## 講義や実習に全力投球！ 都市科学部 湯本莉衣さん



どの授業も楽しい! 演習がとにかく面白い! と、学ぶことに喜びを感じている都市科学部の湯本莉衣さん。幅広い領域の講義が履修できる学科でもあり、多彩な考え方に触れることができるのが自分に合っているそう。学びを通して、自分自身の社会の見方や考え方を再構築し、ポジショニングしている毎日だと言います。

### ご飯を食べたあと 母とおしゃべりTime

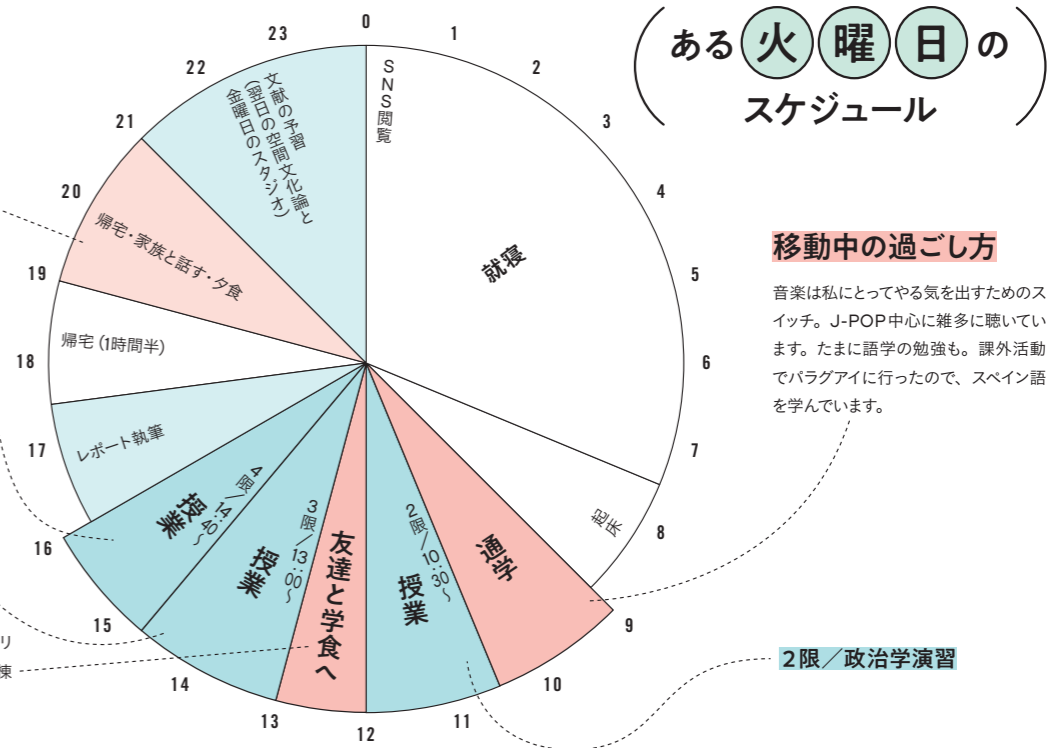
### 4限: 都市人類学演習

### 3限: 地域社会論講義

高齢化など答えが1つではない問題を、どのように解決に導いていくのか。政治哲学の考え方を生かしてアプローチする講義。答えよりも、問題解決の過程をみられるのが楽しい。

### 学食でランチ

友達と話しながらごはんを食べるのがフレッシュタイム。都市科学部講義棟に行けば誰かしら友達がいる。



### 移動中の過ごし方

音楽は私にとってやる気を出すためのスイッチ。J-POPを中心に雑多に聴いています。たまに語学の勉強も。課外活動でバラグアイに行ったので、スペイン語を学んでいます。

### 2限/政治学演習

### オンのシーン



### 実験に集中しているとき



実験を通して、座学で学んだことを「体験」できるのが面白い。高校時代はコロナで実験があまりできなかったのですが、実験できる喜びをいつも感じています。集中して取り組んだ実験がうまくいくと嬉しいし、達成感も大きいです。

### 放送研究会



フェリス学院大学と合同での活動。朗読や動画・音声編集の練習会から、番組制作・放送まで行っています。地元の「マリFM」で月1回「横国フェリス放送研究会 ふらっとタイム」という番組を担当しています。

### オフのシーン



### カフェ「Shoca.」でコーヒーTime

1人で休憩したいときに行くのが、中央図書館1Fのカフェ「Shoca.」。コーヒーが大好きでいろいろな喫茶店に行きますが、こちらの開放的な空間と味わいがお気に入りです。



### 音楽を聴いてリラックス

### マストアイテム ノートPC



実験データの処理、レポート作成、番組制作の動画・音声の編集にとフル活用。パソコンなしではオンもオフもあり得ません。

### お気に入りスポット キャベツ通り



横国から三ツ沢上町駅に行く途中。ランドマークタワーなど横浜らしい景色が広がります。制作を手がけるケーブルテレビ番組「よこふえりTV」でも紹介しました。

### オンのシーン



### 地域課題実習のMTG

「南米農村部の学びを生かした横浜『共生』PJ」、防災まち歩きなどを行う「BOSAIラボ」、都市科学部講義棟を人が滞留できる空間にするプレイスメイキングなどを行う「YUC」。3つの地域活動に参加中です。

### スタジオ科目

### お気に入りスポット 都市科学部講義棟104スタジオ



先生の研究室に配属されるプレゼミ的なもので2・3年次にそれぞれ2つ選び、1年間同じメンバーで学習します。私は三浦倫平先生の社会学、藤掛洋子先生のバラグアイの地域研究・開発人類学の研究室に所属しています。

外に机を持っていたりして、空間を自分たちでつくれる自由さが好き。ふらっと友達に来て話することも。リラックスできる場所。

### オフのシーン



### SNSをチェック

空き時間には、X(旧Twitter)で気分転換しています。



### マストアイテム Bluetoothイヤホン

移動中は音楽が欠かせないので、ずっとイヤホンをしています。



### 帰宅後のルーティン

夕食の後に学校のことなど1日の出来事を母に話す私の大切な時間。1時間くらいおしゃべりします。私の友達の名前もみんな覚えていますが、母にはなんでも話しています。



翌日に備えて予習。しておかないとディスカッションで困ります。



# 横国生のオン&オフ事情

ON & OFF SITUATION OF  
YOKOHAMA NATIONAL UNIVERSITY STUDENTS



CASE\_03

体育会ラクロス部に所属。

経営学部 **山藤風花**さん

大学から始めたラクロスに打ち込む山藤風花さんは、経営学部でマーケティングを学んでいます。ゼミで取り組んだ地元食品メーカーへの戦略提案とラクロス。どちらも

重要なのはチームプレーです。それぞれが与えられた役割を果たし、目標に向かって進みます。ちなみに勉強で疲れたときの息抜きもラクロス動画を観ることなのだとか。



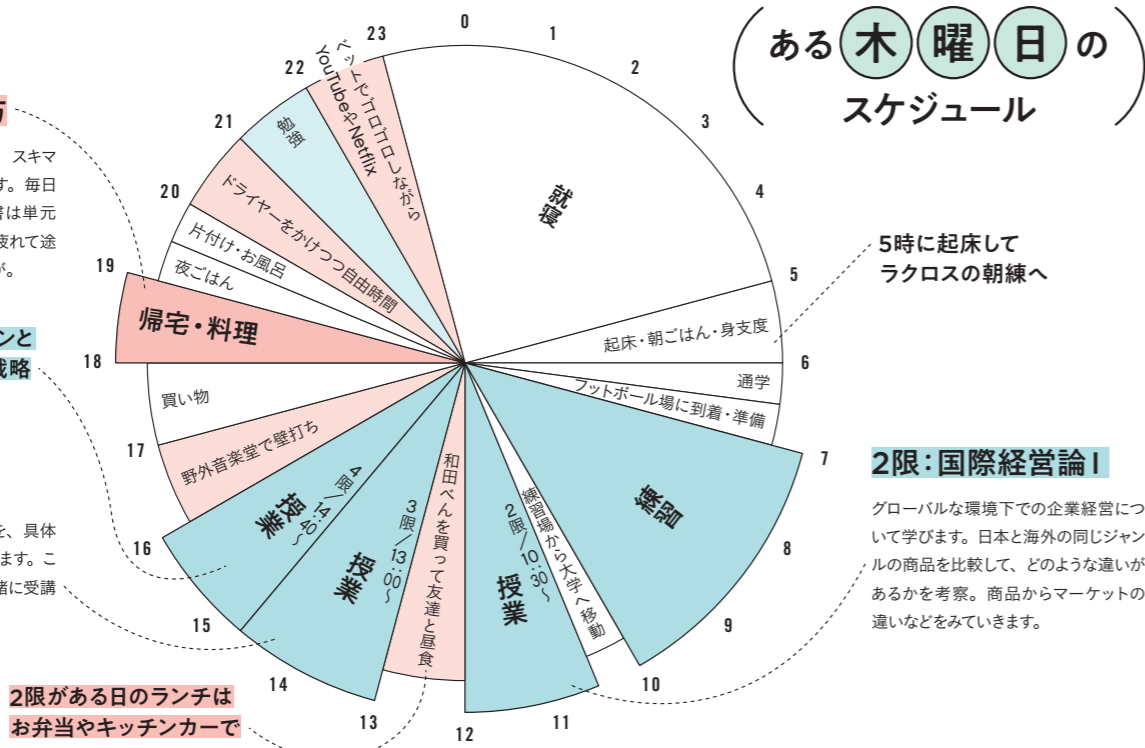
## 移動中の過ごし方

最近ではTOEIC受験に向けて、スキマ時間を英語学習に割いています。毎日単語は100語を暗記、参考書は単元ごとに進めると決めています。疲れて途中で寝てしまう日もあるのですが。

## 4限:イノベーションとプラットフォーム戦略

## 3限:国際環境経済論

環境問題と経済社会の関わりを、具体的な事例を見ながら学んでいます。この授業は経済学部の学生と一緒に受講しています。



## 部活動(女子ラクロス部)



ラクロスは全員が力を発揮しないと点が取れないスポーツ。現在関東学生リーグ2部所属です。1部昇格に向けて週5日、3時間の朝練をしています。4年生がいないチームですが、信頼できる同期と後輩と楽しく練習に励んでいます。

オンのシーン

## お気に入りスポット 横浜国立大学フットボール場



青々とした芝生が広がっていて、晴れやかな気持ちになれる場所。他校は大体が土のグラウンドなので恵まれています。勝利の喜びも、練習の辛さもここに詰まっています。

## マーケティングゼミ



ある有名企業から「若年層の顧客を増やす」という課題をもらい、チームで戦略や解決策を立案し、専務に提案。貴重な体験でした。

## 野外音楽堂で壁当て+おしゃべり



授業のない「空きコマ」のときなどは、チームメイトと壁当てをしながら話をする事が多いです。あっという間に時間が経ちます。

オフのシーン

## ある日のランチMENU



和田べんとは、横浜周辺の和田町を紹介し、みんなでまちづくりを考える学生プロジェクト発案のお弁当のこと。

## マストアイテム iPad



オンもオフもiPadが手放せません。授業中はノートをとるのに便利です、ラクロス部では広報活動に用いる画像を作るのに使用。疲れたときにはNetflixを見るのにも使っています。



iPadで制作したラクロス部のフライヤー



# YNU NEWS

Vol. 09

横浜国立大学の最新ニュース

NEWS 1

## 創基150周年・開学75周年記念式典・祝賀会を開催

横浜国立大学は、2024年に創基150周年・開学75周年を迎えました。これを記念し、11月9日(土)はまぎんホール ヴィアマールにおいて、記念式典・祝賀会を開催しました。記念式典では、梅原出学長の式辞の後、来賓祝辞をいただき、本学卒業生で森ビル株式会社代表取締役社長の辻慎吾様に、「次の100年も成長し続けるために」と題してご講演いただきました。また、アカペラグループ「夜にワルツ」による学生歌『みはるかす』など5曲の歌唱があり、美しいハーモニーがホールに響き渡りました。



## 横浜国立大学 創基150周年・開学75周年記念募金事業

創基150周年・開学75周年を記念し、募金事業を実施しています。詳細につきましては、QRコードより特設WEBサイトにてご確認ください。



### Information

- 【募集期間】** 2023年4月～2028年3月31日
- 【目標額】** 総額5億円
- 【募集金額】** 個人/1口1万円～団体・法人/1口10万円～  
※以上の金額にてご寄附のお願いをさせていただいておりますが、金額に関わらず、ありがたくご寄附を頂戴いたします。
- 【ご寄附の方法】** 横浜国立大学基金 WEB サイトからクレジットカードにてご寄附いただけます。

〈ご寄附に関するお問い合わせ〉  
横浜国立大学 卒業生・基金担当  
E-mail: ynu.kikin@ynu.ac.jp  
TEL: 045-339-4443(月～金 9:00～17:00)



NEWS 2

## 半導体・量子集積 エレクトロニクス研究センターの設置

2024年4月1日、半導体・量子集積エレクトロニクスに関する学術的研究と新技術の社会実装を加速する研究拠点として、総合学術高等研究院に半導体・量子集積エレクトロニクス研究センターを設置しました。本センターは、「令和6年度文部科学省教育研究組織改革分(組織整備)」における事業『半導体人材の育成並びに半導体「後工程」の研究開発事業—半導体・量子集積エレクトロニクス教育研究拠点形成—』に基づくものです。半導体「後工程」の研究力を強化し、我が国の半導体産業のサステナビリティの確立に寄与することを目的としています。

NEWS 3

## 羽沢横浜国大駅前にサテライト施設「YNU BASE HAZAWA」を設置—社会・地域課題解決研究・活動発信拠点として

羽沢横浜国大駅周辺におけるまちづくりの推進を図り、2024年10月1日に羽沢横浜国大駅前リビオタワー商業施設 HAZAAR 内に、サテライト施設「YNU BASE HAZAWA」(ベース ハザワ)を設置しました。横浜国立大学の有する多様な学術知・実践知を駆使した分野連携及び多様なステークホルダー(自治体、産業界、学校、市民等)との連携で、多角的に、社会・地域課題を解決していくための研究・活動の拠点として、地域の発展に貢献してまいります。

- (主な活動内容)
- ・地域連携活動拠点
  - ・副専攻プログラム地域交流科目における地域課題実習活動拠点
  - ・小規模講義、会議利用
  - ・教職員の活動スペース
  - ・地域住民との交流スペース

### アンケートのお願い

「横国刻々」のより充実した誌面づくりのために、ぜひWEBアンケートへのご協力をお願いいたします。アンケートにご協力いただき、ご応募された方の中から、抽選で3名様に本学オリジナルグッズをプレゼントいたします。当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

応募締切:2025年8月31日(日)  
ご回答方法:WEBにてご回答ください。右記のQRコードよりアクセスできます。

